

鉄の歴史館

昆 勇 郎

Yuro Kon

1. 鉄の歴史館建設の経緯

釜石市は 鉄の都・魚の町として幕末以来 わが国の近代化とともに急速に発展を遂げてきた三陸沿岸の産業都市である。

殊に 安政4年(1857) わが国で最初の鉄鉱石を原料とした洋式高炉が 釜石の地で経営者 貫洞瀬左エ門(岩手県下閉伊郡山田町出身) 技術者 大島高任(盛岡市出身)らの優れた技術により 出鉄に成功をみて以来 鉄鋼業の発展消長は そのまま釜石の歴史であるといっても過言ではない。 また釜石市は 近代になって明治29年と昭和8年の三陸大津波による被災 さらに昭和20年7月 8月の二度にわたる米英海軍による艦砲射撃の被害など そのつど壊滅的被害を受けてきたが 釜石市民は こうした幾多の困難にもめげず 一丸となって町の復興に努めてきた。 そして昭和30年4月 近隣の甲子 鶉住居 栗橋 唐丹の四か村と合併し 鉄と魚の二大産業を柱として 同38年には人口9万1千余 世帯2万余を数え 名実ともに三陸沿岸における産業 経済文化の中心都市として発展してきた。 しかし その後基幹産業である鉄鋼業の 構造不況により 新日本製鉄(株)釜石製鉄所の縮小合理化が進められ さらに水産業の不信などが大きな要因となって市経済の停滞 人口の減少傾向など 釜石市をとりまく経済・社会環境は極めて厳しく かつてない試練に立たされるに至った。

昭和56年3月議会の最中であつた。 当時 図書館長を努めていた私のところへ市の財政課から「市長方針として鉄鋼産業会館(後に「鉄の歴史館」に改名)の建設をすすめることについて その下案を直ちに提出しなければならない」と相談をもちかけられた。 目的は自治省が進めている不況対策を目的とした地域経済振興対策の地域指定をうけて景気の回復を図ることをねらいとするものであつた。

私は 議会を中座して かねてから自分なりの構想にあつた博物館的な構成を主軸とする案を提唱した。

同年10月 予想どおり地域指定を受け鉄鋼産業会館の建設方針が確定 庁内に建設検討委員会が設置され その一員として建設にかかわってきた。

鉄の先駆者 大島高任の偉大な業績を後世に伝え残そ

うとすることをねらいとする鉄鋼産業会館は 地域経済の振興に資するものであることという使命を担って発足したのである。 当初の予算規模は約10億円であつた。 しかし 市の財政事情により半額となり また そのことから工事も縮小するという破目となり 担当課 及び当市の文化施設に実績をもつ佐藤武夫設計事務所と何回となく会議がもたれ 59年6月28日着工まで実に2年余の検討が繰り返された。

私は59年10月5日付をもって教育委員会から市長部局に出向となり 企画開発部企画開発課付課長 鉄の歴史館準備室長となり 主に展示関係を担当した。 そして60年7月1日を以て経済部に移籍 鉄の歴史館長となり今日に至っている。

56年3月 博物館の構想から出発した鉄の歴史館はまさに 近代技術を駆使した視聴覚的 科学的なユニークな姿となって昭和60年7月の誕生を迎えたのである。

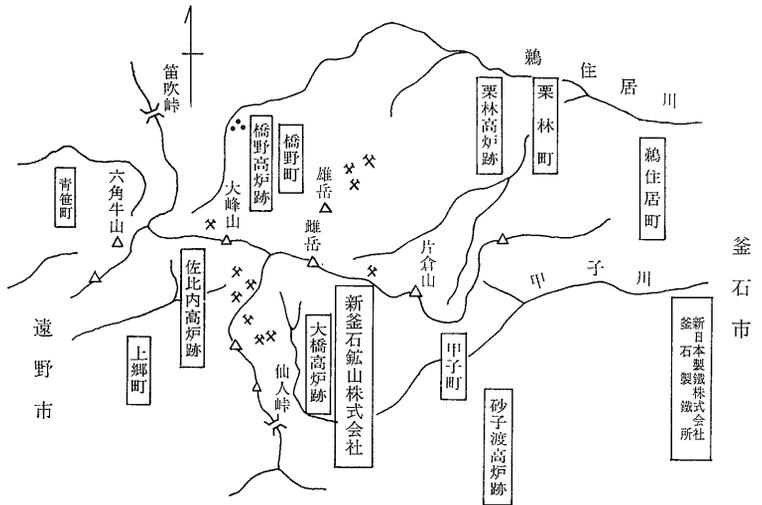
2. 釜石地方における鉄鉱石製錬以前の製鉄概要

近世の南部領における鉄山は 寛文3年(1663)に遠野(現 遠野市)出身の川原屋清助という人が遠野を出奔し出雲の鉄山に入り そこで番子から本主となるまで17年間働き50歳で帰郷し 釜石浦の桐善兵衛(近世南部藩において 三陸沿岸の俵物を本業として財をなした大槌町 吉里吉里の吉里吉里善兵衛こと前川善兵衛と推察される人物)と心を合せ 栗林山(現 釜石市栗林町)に鉄山を取立てたことから始つた。 以来 桐善兵衛は和山(現 釜石市橋野町)大槌山(現 上閉伊郡大槌町)と 享保10年(1725)まで鉄山を経営した。 この頃の鉄の原料は砂鉄であつて 鉄鉱石はまだ原料ではなかつた。

鉄鉱石の発見は 享保12年(1727)といわれている。 発見者は南部藩大槌通豊間根村(現 下閉伊郡山田町豊間根)石峠の旧家阿部氏(現 豊間根姓)出身の将翁阿部友之進照任という幕府御用の本草学者である。 将翁は阿部萬右衛門盛任の四男として慶安3年(1650)に生まれ 宝暦3年(1753)正月28日に104歳で没した。

豊間根の阿部家に菅敬愛(馬笑=新聞記者 盛岡の人)書の「豊間根氏系図」がある。 これによれば

釜石地区の洋式高炉跡略図



阿部萬右エ門

敬任 初守長阿部七郎左エ門
 寛永13年生 兄厚任一子無之依テ
 本家ヲ嗣ク
 南部28代重直公ヨリ敬任ノ二字ヲ
 賜フ
 元祿14年辛巳年梵鐘ヲ鑄テ龍谷山
 瑞雲寺ニ挂ク
 宝永元年甲申年4月15日卒年68
 法名 法輪軒性庵月誉居士
 室 山崎善右エ門女
 元祿9年子8月8日卒
 法名 月底妙白大姉
 女 寛永16年生
 友之進
 慶安3年生
 年22家出行ク所ヲ知ラズ
 とある。(・印私註)

将翁について家伝によれば22歳のとき家を出奔し行方
 知れずとされている。しかし 諸説によれば将翁は延
 宝年中(1673—80)に大阪をめざし船に乗り 八戸沖で台
 風に遭遇し 中国の阿馬港に漂着 抗州に行きそこで医
 学 本草学を学び18年後に長崎に帰国したといわれている。
 将翁は帰国後しばらく長崎 熊本に滞在し その後
 江戸に出て 享保6年(1721)72歳にして幕府の採葉使
 として出仕し 丹羽正伯 植村佐平次 松井重康らと全
 国を薬草採集のため踏査している。

将翁が釜石地方に最初に採葉使として来たのは享保12
 年(1727)4月28日で 78歳のときであった。同年7月

2日には「甲子村久子沢村より掘出候 磁石正味百匁貫
 五百六拾匁 拾五箱 鮎貝江戸え遺す。 緑青貳拾斤
 盛岡御目付所え遺す」と大樋古今代伝記(大樋代官所の記
 録)にある。

将翁80歳二度目の来訪は 享保14年(1729)7月で
 10日に盛岡を発し 大迫で早池峰山中を調査 13日附馬
 牛村から宮守村を経て遠野に入り 17日に細越村森ノ下
 に行き 18日佐比内のヒサゴ沢で磁石の実査を行い、19
 日に仙人峠を越えて昼は甲子村洞泉の与惣右エ門の所で
 休み釜石に赴いている。

南部藩記録「内史畧」に次のことがある。

釜石地区洋式高炉一覽表

鉄山名	高炉 番号	創業年月	主任技術者	経 営 者 (慶応年末まで)	稼 動 人 員	牛馬数	1カ年 出鉄量	鉄座開設年月
大 橋	第1	安政4年12月	大島 高任 " (および) 清岡澄	支配人経営(貫洞瀬 左衛門・中野作右衛 門・中野大助)→藩 直営→支配人経営 (高須清次郎)	800人余 (明治元年~2年)	牛100頭 馬 40頭	約17~ 18万貫	明治元年9月
	第2	万 延 2 年						
	第3	"						
橋 野	第1	万延元年秋	田鎖 仲 " 大島 高任 田鎖 仲	藩直営→支配人経営 (小野権右衛門・瀬 川清兵衛)	1,000人余 (明治元年~2年)	牛150頭 馬 80頭	約25万貫	明治元年6月
	第2	文久元年						
	第3	安政5年 文久2年						
佐比内	第1	万延元年	清岡 澄 "	支配人経営(高須清 次郎・遠野村忠平)	250人余 (明治2年)	牛183頭	約10万貫	明治元年 (月不詳)
	第2	"						
砂子渡	1	慶 応 元 年	"	支配人経営(貫洞瀬 左衛門・松岡清蔵)	不 詳	不 詳	不 詳	明治元年8月
栗 林	1	慶 応 3 年	"	支配人経営(砂子田 源六)	604人 (明治22年)	不 詳	約10万貫	慶 応 3 年 5 月
合 計	10基							

「東涯先生の輪軒小録に載磁石の事、

享保丁未年(12年)10月辰1日 西三伯医人の子元徳 磁石を
持来り示す。 近年丹羽正伯を召出され 諸国の薬物御吟味に
付 所々巡行會議の所 奥州南部の營に閉伊郡大槌と云所有
其村の山より掘出すとなん。 四五寸程の一拳石黒し 一方
の小口せん屑を附れは蝸毛の如く吸付 針を付けは五ツ程速下
る南を指こと弱し 又一塊来りし由 南ノ方を慥かに指と云共
鋸夾剪の類を近付れば飛付て自ら附となん 江戸へ持帰る由に
て是は不見 亦膳饈一包見せらる 色甚翠也。 琥珀も出る由
磁石日本に産することと前代未聞珍しきこと也。 牧子野此説
を見て橋子園(立花万右エ門)に談す。 寛政辛亥(3年=1791)
の夏 子園大槌泉の令にて行しか 官所(大槌代官所)の記録
を見るに。

享保年の記

磁石十五箇正味百一貫五百六十一匁 右は大槌之内甲子村大
橋山久子沢に在 江戸より参候 丹羽正伯薬草吟味巡回之節 磁
石未だ若く用に立不申と申候由 同年一 緑青三貫五百二十文
右同所より出 盛岡行 右之記に寄て此頃承りたる由にて 磁
石一ツ子野へ贈り来る 子園云 磁石に南北有 北を指磁石は
劔先に付 南を指は尾に附て据り宜きと聞り 大槌に磁石の損
しを直す者有 南北の磁石を持たる者有 価高き物也と聞ゆ。 本
草に山の陽産鉄者陰必有磁石蓋二物同気也と有。 久子沢より
五六里南栗林村 橋野村有 六十年計も前ならん。 此村の山に
て鉄を掘出し 大に繁昌の鉄山なりしよし 本草の説に違はさ
る様に覺ゆと 子園の咄子野より伝へて見ゆ。」

寛政3年(1791)の夏に立花万右エ門が大槌代官所
で享保年間の磁石についての記録を採録していることが
知られるが 何年であるかは明記されていない。 しか
し その量目などにより享保12年7月2日の事であると思
われる。 また 阿部将翁についてはなにも記録されて
いないが 将翁のことが 大槌古今代伝記に記録されて
いることから その時一緒に同行したものと推察され
る。 また 60年ばかり前の鉄山経営ということは 桐
善兵衛が経営していた頃で 寛文7年(1667)頃にあ
たる。

これらのことから将翁再度の調査の際は 将翁が中心
となって行われたものではないか もしくは将翁の単独
調査かのいずれかと思われる。

南部藩家老席日誌(雑書)に次の記録がある。

「享保14年(1729)12月 阿部友之進薬草御用で大槌
通り入り 磁石発掘の事あり。 13日薬草種目を書上げ
るも 24日咎により戸締めを命ぜられる。」

翌15年2月の項には

「公義より阿部友之進調査の磁石浜菊について尋ねる」
とある。

将翁が どのような曲事をしたか 全く不明である。

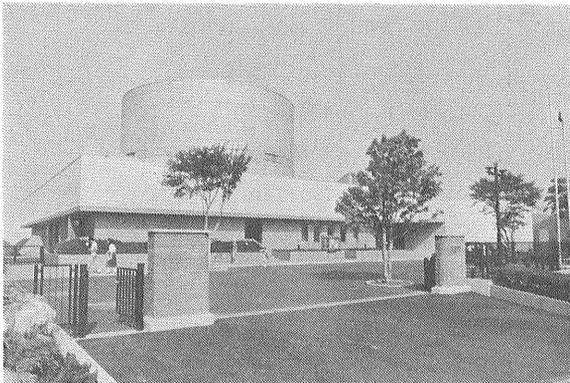
釜石市甲子町に将翁について 「将翁が 甲子村大橋の
久子沢を踏査していたとき 急に磁石の針がある方向を
さして動かなかつたので 将翁は驚き何回となくいまき
た道を往復し試してみたが この地点に来ると磁石の針
は前同様の位置を示すので 不思議に思いその方向に行
くと大きな岩にぶつかり磁石の変化をみたことから 将
翁は この岩を『磁石岩』と名付けたという。」 という
話が残っている。

この磁石岩は文化10年(1813)5月1日に大槌代官所
御山奉行小川清六らにより実測されている。 この調査
のとき作成された絵図面が 釜石の旧家野田武義家に保
存されている。 それによれば「磁石岩の大きさは 長
さ3丈程(高さ)幅4間ばかり」とある。 磁石岩は惜し
くも 昭和27年3月30日の大橋鉱業所(現 新釜石鉱山株
式会社)露頭大崩落の際に埋没したのでいまは見るこ
とが出来ない。

釜石地方の鉄山事業は 桐善兵衛経営以後も地元の人
々により経営されている。 栗林村(現 釜石市栗林町)
では3人の鍛冶組により「地吹きほど役」として正徳
享保年代に「延鉄」が藩に上納されている記録が残っ
ている。 この地方には いまも「かなほっぱ」「ざんぞ
うば」などの製鉄に関係のある地名が残っている。 し
かし原料が砂鉄であったか 鉄鉱石であったかは不明で
ある。

鉄鉱石を原料としての鉄づくりの初出は 遠野の石懸
仁左エ門で 大橋久子沢鉄山の採掘を文政2年(1819)
4月に願ひ出たが許可されなかった。 しかし 同年8
月には盛岡青物丁の利兵衛が 大橋山鉄鉱の採掘を願
ひ出て許可され旧式鉱炉を設置したが その結果は不明で
ある。 一方 橋野鉄山においては 文政8年(1825)
4月に盛岡仙北丁の清七なる者が 橋野村(現 釜石市橋
野町) 猿館御山にて鉄山を行いたいと申し出 橋野村民
の意向を問い合わせた結果 村一統から鉄山経営は中止
してくれとの注文がつき訴訟が起きている。

この年代になると急速に変化する社会情勢から鉄の需



鉄の歴史館全景 正面玄関

要を求める事が強くなったのであろう。盛岡藩（南部藩は文化14年（1817）11月から盛岡藩と改称）では嘉永2年（1849）6月14日に大槌通甲子村久砂子沢鉄山の磁鉄鉱を奥御鉄山とし試吹御用懸りに湊逸兵衛を登用また同年10月3日試吹後に奥御手山（藩直営）として同月5日を以て湊逸兵衛を「大槌通久砂子沢鉄山差配役」に任命した。

湊逸兵衛は盛岡藩大槌通船越村（現 下閉伊郡山田町船越）出身の御給人で天保10年（1839）11月1日に献上機材の吟味 杣取扱方御用懸りに任命された。

嘉永2年（1849）に高島易断創始者高島嘉右エ門が当地方に来遊した際に大橋から黒色の丸石一個を貰い翌日山田港の湊氏の所に宿泊したとき湊にこの丸石と普通の石を比較し丸石に多量の鉄分が含有していることを力説した。この丸石を製錬することにより膨大な利益を得るべしとして自分1人では経営は出来ないで湊氏の船と牛を提供してくれないかと相談を持ちかけた。話はまとまり後日湊氏は船20隻にこの丸石を積み室羽鉄山（現 下閉伊郡田野畑村）にもっていき 炉で分解してみたが成功しなかったという。前出の野田武義家文書によれば「湊氏は嘉永2年8月2

日に鉄をつくるため大橋山の磁石岩を砕き取ったとある。湊氏は大橋鉄山で岩鉄の製錬を3度も試みたがいずれも成功しなかったという。こうしたことが原因か湊氏は安政元年（1854）4月2日に御役御免となり安政4年（1857）2月4日53歳で亡くなっている。

この年の12月1日に盛岡藩士大島高任は大橋に洋式高炉を築造し鉄鉱石を原料として出鉄に成功している。

湊逸兵衛が生存しこの快挙を知ったとしたらどんな思いであったろうか。大島高任の大橋での洋式高炉の成功にはこの湊逸兵衛の苦心した製錬の努力の影の力があつたものと思われる。

3. 大島高任の業績

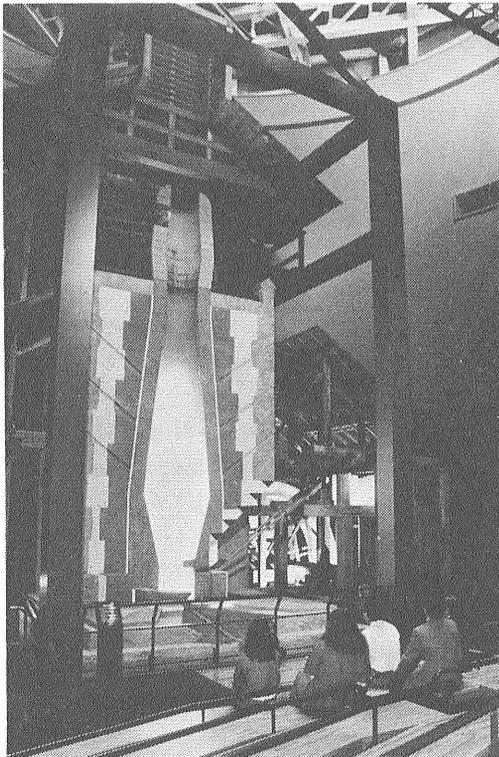
嘉永6年（1853）米国のペリー提督が浦賀に入港して以来日本の海防対策は急を告げ特に水戸藩主徳川斉昭は家臣の藤田東湖推薦により盛岡藩士大島高任を主任格として採用し反射炉を築造させ大砲製造に当たさせたが砲身に亀裂が入りよい大砲は出来なかった。このため高任は南部領の大槌通甲子村大橋（現 釜石市甲子町大橋）から産出する鉄鉱石を原料とすることを考え安政3年（1856）水戸藩を引きあげ盛岡に帰り藩主から鉄鉱石の採掘の許可を得た。金主を山田町出身の給人貫洞瀬左エ門として大橋に洋式高炉を築造し翌4年12月1日に鉄鉱石を原料とし木炭を燃料とする銃鉄の出鉄に成功したのである。大島高任はこの洋式高炉の築造に際し手引書としたのはオランダ人砲兵少将ユ・ヒュギーニンが刊行した「リェージュ国立製鉄大砲製造所における鑄造法」であったといわれている。この成功により鉄の原料が砂鉄から鉄鉱石へかわりわが国における近代製鉄技術の一大飛躍をなさしめたものとしてこの鉄の革命をもたらした大島高任は「近代製鉄の父」と称され出鉄に成功した「12月1日」は現在「鉄の記念日」となっている。

釜石市は大島高任のこうした業績を讃え高任が築造した橋野洋式高炉跡を後世に継承するため保存することとし昭和30年に学術調査を行った。またこの高炉跡は同32年6月に次の理由により国の指定史跡となった。

指定年月日 昭和32年6月3日

指定理由

この史跡は安政年間に大島高任の技術指導によって製造された洋式高炉3座の遺跡である。幕末に本高炉のほか大橋に3座 佐比内に2座 栗林及び砂子渡に各1座 合計10座が良質豊富な鉄鉱石の産地を背景に いずれも高任の指導によって建設された。これら高炉は鉄鉱石を原料とし銃鉄の製造に成功したわが国最初の洋式高炉である。



総合演出シアター内高炉模型



大島 高 任

かくして わが国近代鉄鋼業は深い山々に囲まれたこの地にその発祥をみ やがて明治維新を迎えるや官営製鉄所の発足となり 釜石製鉄所の礎を築いたのである。しかして 往時の偉業をしのび得るものは僅かにこの遺跡あるのみで わが国の鉄産業発達史上唯一の文化遺産として この史跡のもつ意義はまことに大きい。

昭和59年4月には この史跡保存に尽力したという功績により 米国金属協会から わが国で始めて HL賞 (歴史的遺産) を受賞している。

4. 釜石鉱山の地質鉱床概要

釜石鉱山は 釜石港の西方約20km 三陸沿岸部と北上内陸部とが境をなす分水嶺に位置する。付近には片羽山 (1313m) 大峰山 (1147m) 天狗森 (1190m) らの山々があり 地形は急峻である。

本鉱山の鉱床は接触交代鉱床と呼ばれ 鉄と銅を産する。鉄鉱石は磁鉄鉱 銅鉱石は黄銅鉱 キューパ鉱が主鉱物であり 他に柘榴石 ヘデン輝石 緑簾石らからなるスカルンと称する脈石鉱物が存在する。本鉱山の発見は 18世紀初頭 (享保12年) 阿部友之進で 安政4年大島高任の洋式高炉によって操業が開始された本鉱山は明治以降になって本格化した。明治25年 野呂景義 香村小緑は埋蔵鉱量を2840万tと推定したが 明治25年から昭和59年までの累計粗鉱生産量は約6400万tに達する。坑道は海拔950—150m レベル間にあり その全長は約140kmである。また 鉱石を探るために実施した試錐の総錐進長は約800kmである。採掘方法は 始めは地表近くの露天掘が主であったが 開発が深部に移行するに従いサブレベル法 ルームアンド法がとられている。

鉱床は蟹岳複合貫入岩体の東西両翼に存在し それぞれ東列鉱床群 西列鉱床群と呼称されている。東列鉱

床群には六黒目 高前 外ヒサゴ 内ヒサゴ 細越 前山 鬼ヶ沢らの鉱床が属し 南北方向に約 9 km 間ほぼ一直線に配列している。西列鉱床群は 北から青の木 大峰 日峰 佐比内 新山 天狗森 滝の沢 杓掛 大仙らの鉱床からなり 南北約 6 km 東西約 1.5 km の地域に存在している。

5. 鉄の歴史館の概要

鉄の歴史館は 自治省の地域経済の体質強化をはかることを目的とした地域経済振興対策の特定事業として導入計画され 昭和59年6月 総事業費7億6千万円起) 債6億3千8百万円 一般財源1億2千2百万円) で 市の単独事業として2か年計画により着工 昭和60年7月20日に落成 オープンとなった。

館の規模は 敷地面積5400㎡ 建物は鉄筋コンクリート造り 地上1階 延べ床面積1245㎡で 展示部門面積582㎡の比較的コンパクトな館といえる。

6. 鉄の歴史館の構成

1) 総合演出シアター

大島高任が安政年代に橋野村青の木 (現 釜石市橋野町 青の木) に築造した 洋式高炉を原寸大に復元した大模型を中心に 音と光と映像により巧みな演出を約10分間行う。また 水車やフィゴのしくみ そして湯出し時 (出鉄) の状況も十分見ごたえがあるものになっている。左側には当時の原料である鉄鉱石 燃料 そして炉を造った耐火煉瓦が展示され 中央に橋野三番高炉原寸大模型がある (高炉の高さ約 8 m 上屋の高さ約14m)。

その左上にマルチイメージスクリーン (6m×4m) 1面があり フィルム約 500 枚をもって「時代を翔ける鉄」を10分間にわたって上映する。右側の水車やフィゴの稼動には迫力があり これらは すべてコンピュータにより駆動されている。

右側手前には釜石周辺の鉄づくりの歴史を物語る「釜石の鉄山」模型があり その前に現在の73mの高炉の70分の1の模型が 大島高任が築造してから約 130 年間の技術の進歩を示すように展示されている。わが国の近代製鉄の夜明けを如実に表現している展示室であるものと思う。

2) 資料展示コーナー

大島高任コーナーと釜石と鉄のコーナーに分け 大島高任コーナーには 高任の生涯にわたる史料および大島家由緒を示す貴重な古文書類を展示している。



展示室の一部

釜石と鉄のコーナーでは 釜石を中心とした周辺の製鉄の歴史に関連した現物および文献を展示している。

古代から現代までの製鉄の変遷を示すパネルは 歴史史料ともいえるもので学習には大いに役立つものである。

古代民俗的な資料として鉄製の「オンラサマ」一対が展示されている。これは わが国では唯一のもので非常にめずらしいものである。

現代の製鉄品としては 新日本製鉄(株)の製品があり その利用面についての展示品は 日常生活のなかに姿を変えて活用されている製品を現物で展示しており 生活の中での鉄のありかたをより身近なものとして感じることができ興味深い。さらに わが国唯一の鉄鉱山である新釜石鉱山(株)から掘出した良質の鉄鉱石(磁鉄鉱)1個(約1トン)を展示し その脇に当地方特産の餅鉄も展示し 磁石を置いて磁力を経験させている。この鉄鉱石の脇には釜石鉱山の鉱床図をパネルでもって展示している。

3) 鉄とあそぶコーナー

このコーナーは 体験学習の場として大人から子供にいたるまで自由に遊べるコーナーとなっている。知恵の輪をはじめ 力だめし ブリキのオモチャなどさまざまな玩具があり 好評を得ているコーナーである。

ラウンジの周辺には 現代彫刻家の鉄に関係した彫刻が数点展示されているのも この館の一つの特色でもある。

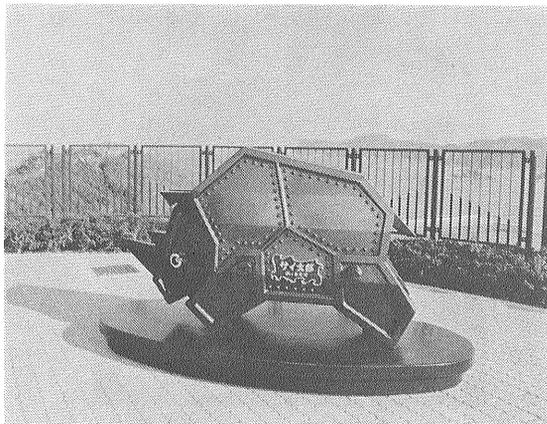
4) 館外展示物

玄関前のシンボル彫刻(鉄製品)「時と空間に遊ぶ箱達」の動きは まさに高炉から流れでる鉄の炎を思わせるものがあり 来館者の足をとめるものである。

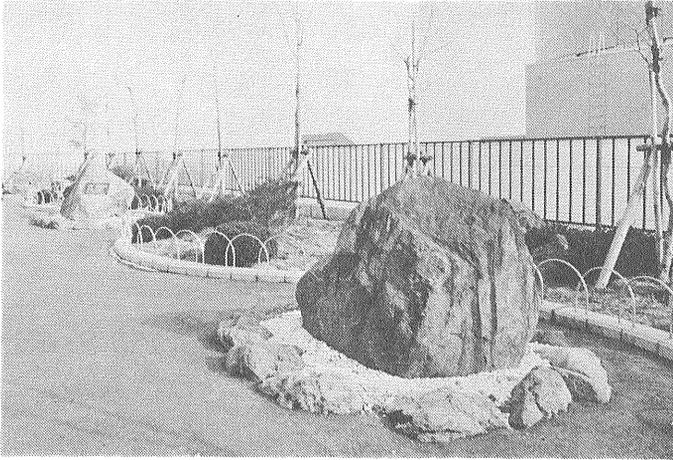
館のシンボルキャラクターとして 本年1月に除幕したばかりの「サイ太郎君」は 子供たちのマスコットとして また 海を望む大観音をバックとしての記念撮影の場としても大変人気がある。

駐車場には 新釜石鉱山(株)から提供を得た 磁鉄鉱5トン 3トン各1個 スカルン(ザクロ石)5トン1個が展示されている。これはいずれも新山鉱床から掘出したもので磁鉄鉱の鉄品位は60%である。

駐車場西側の一面に 釜石製鉄所提供の機関車1台がある。この機関車は昭和8年に釜石製鉄所で初めて日本製の機関車2台を購入 大橋と釜石間を運行させた機関車の1台で 市民からは「社線」と呼ばれ親しまれた鉄道を走行した機関車である。



サイ太郎君(シンボルキャラクター)



磁鉄鉱群（駐車場）

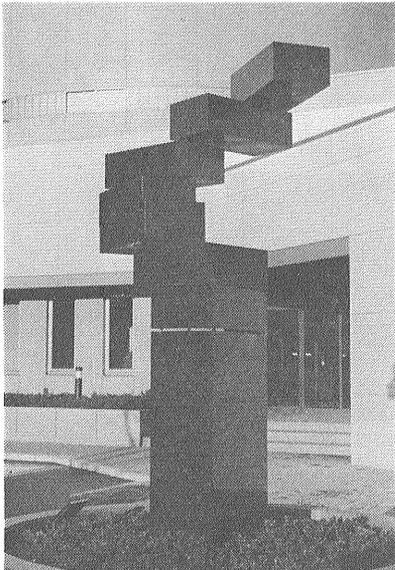
7. 鉄の歴史館の責務

昭和60年7月20日オープン以来 本年2月6日 目標入館者5万人を突破したことは 鉄の歴史館のもつ地域経済振興対策の役割を果しつつあるものと思う。釜石市の歴史的環境を文化面でみた場合 近代日本の産業の発展に大きく貢献した鉄づくりの町であるにもかかわらず 釜石市の地域文化の高揚は 他の産業都市と比較しおこなれているといっても過言ではない。

明治以降の釜石市は 天災（つなみ）戦争（艦砲射撃）等により 街の文化事業の発展が阻害されてきた。しかし 街づくりの最も大切なことは 産業の発展もさる

ことながら 街を構成する人々の文化意識の向上が大切である。言い替えば 次の世代を背負う人々の人づくりを大事にし その施設の拡充があってこそ まさに文化都市としての発展が約束されるものと思う。このようなことから 鉄の歴史館が大島高任の偉大な業績を後世に継承する重要な意義をもつものであるが その半面 街の文化を代表する施設であり 文化 経済 人づくりと地域社会に貢献する度合いは非常に大きいものがある。今後 鉄の歴史館が釜石周辺の都市は勿論のこと 県内外に対する役割を拡大し ますますの発展を願い期待するものである。

最後に この館の建設に大きく寄与された大島康次郎・夏江御夫妻 そして新日本製鉄（株）釜石製鉄所 新釜石鉱山株式会社はじめ 多くの市民から絶大な協力を得たことを感謝するとともに紹介しておきます。



動く彫刻（溶鉄から吹き上がる炎を表現する館のシンボル）

引用文献

1. 鉱山秘録（嘉永4年）
2. 年代相伝記 野田武義家文書
3. 将翁阿部友之進年譜 拙稿（未定稿）
4. 鉱山紀年録 日本鉱業史料集第三期近世篇58年刊（編集日本鉱業史料集刊行委員会）
5. 釜石鉄鉱山の開発—湊逸兵衛の製鉄 岡田広吉「鉱山金属文化」産業考古学会鉱山金属分科会誌 60年4月創刊号
6. 新釜石鉱山株式会社探査概況 同社採掘部鉱務課 59年12月